

# 法 覺 院

号院 式寺 十立 七單 百宗 式蓮 第日  
人法 覺院  
見山 妙見  
九二六 三六二  
地番 香中 市上 芝中 香中 芝中 香中 芝中  
九三五二 七七八 七四五七 七四五七

電話 七四五七 七七八 七三五九  
F A X 七四五七 七八八 七三  
H . P http://www.hougakuin.or.jp  
E . M nara-kasiba@hougakuin.or.jp

## 七 月 度

一日(金) 大神様感謝法要 午前十時半  
十七日(日) 月例感謝法要 午前十時半

二十六日(火) 開基上人月命日法要 午前十時半  
八月度

一日(月) 大神様感謝法要 午前十時半  
六日(土) 法覺院霊園墓回向 午前五時

七日(日) 法覺院霊園墓回向 午迄  
八日(月) 盂蘭盆柵経参り 実施御家庭へ

十六日(火) 盂蘭盆柵経参り 日時御通知  
二十一日(日) 施餓鬼法要 午前十時半  
二十六日(金) 開基上人月命日法要 午前十時半

### 行事について

六月に入り例年より早い入梅です。ムシムシとする嫌な季節への突入、でもこの露が無ければ農家の方々にとっては農作業にも関わる大切な季節でもあり、むやみに嫌な季節とは申せませんが、日本の四季の中の雨の恵みでもあり、感謝する事を忘れてはいけなと考えます。さて、この月も後半と早足で季節の流れが進んで参ります。

今年も七月・八月の当院行事御案内をさせていただきます。最初に過日皆様方へ葉書にてお知らせさせて頂きました様、本月から法要日の昼飯を廃止とさせて頂きました。遺憾ながら開基上人以来続いてきた供養の一環を取り止めと為す事に、皆様方の御理解の程を御願ひ致すと共に、茲に到った経緯には、すべて私のいたらぬ処と深くお詫びと反省の心で言葉もありません。

七 月 度 の 法 要 日 終 了 後 の 清 掃 奉 仕 に つ い て 、 御 参 加 戴 け る 皆 様 に は 誠 に 申 し 訳 御 座 い ま せ ん が 、 当 日 は 各 自 昼 食 の 御 支 度 と 水 分 補 給 の 御 用 意 を 御 願 ひ 致 す と 共 に 、 熱 中 症 予 防 対 策 を と っ て 戴 く 事 を 御 願 ひ 致 し ま す 。

続 いて 八 月 度 の 御 盆 の 柵 経 参 り に つ い て で あ り ま す が 、 こ の 期 間 中 に 皆 様 の 御 自 宅 御 仏 前 に 祭 祀 し て 頂 く 小 塔 婆 で あ り ま す が 、 七 月 度 法 要 日 に 寺 務 所 前 に 御 用 意 致 し ま す の で 、 お 持 ち 帰 り く だ さ い ま す よ う 御 案 内 を 申 し 上 げ ま す 。

こ の 間 祭 祀 成 さ れ た 小 塔 婆 は 同 月 二 十 一 日 当 院 御 施 餓 鬼 法 要 に て 再 度 御 供 養 致 し ま す の で 、 当 日 御 持 参 の 程 を お 忘 れ な く 御 願 ひ 致 し ま す 。

尚 、 当 日 御 来 山 出 来 な い 御 方 様 は 当 日 法 要 に 間 に 合 う よ う に 御 郵 送 頂 き ま す 事 を 御 案 内 申 し 上 げ ま す 。

施 餓 鬼 供 養 料 に つ い て は 小 塔 婆 一 枚 に つ き 三 百 円 の 回 向 料 と な っ て お り ま す の で 、 御 案 内 申 し 上 げ ま す 。

### 今この時は...

大 震 災 の 残 し た 爪 痕 は 非 常 に 大 き く 、 未 だ 復 興 の 兆 し す ら 見 え て い る の か 、 い な い の か が は っ き り し ま せ ん 。 そ ん な 中 で も 眼 に し 、 耳 に 入 っ て く る の は 、 少 し で も 復 興 の 一 助 を 担 い た い と 居 て も 立 っ て も い ら れ ず 現 地 に 向 か う 人 々 、 或 い は そ れ が 叶 わ な い な ら ば と 切 な る 願 い を 込 め て 自 分 に 出 来 る こ と は な い か と あ れ け れ と 想 い 巡 ら す と い う 状 況 下 で は な い で し ょ う か 。 そ れ に し て も 、 海 外 で 高 評 価 を 戴 い て い る 日 本 人 の 「 冷 静 さ 、 慎 ま し さ 、 優 し さ 」 等 は 間 違 い な い よ う で す 。 そ れ は そ う で し ょ う 、 今 日 本 が 非 常 の 事 態 に あ る と い う 事 実 か ら 日 本 全 土 を 挙 げ て 国 民 が 思 い を 一 つ に し て い る 時 な の で す か ら 。

い う ま で も な く こ の 娑 婆 世 界 は 、 御 釈 迦 様 が 御 生 ま れ に な り 、 御 修 行 を 重 ね て 、 さ ら に 悟 り を 開 か れ た 土 ( と こ ろ ) で あ り ま す 。

と い う こ と は 仏 の 国 土 で あ り 、 こ の 仏 国 土 は 決 し て 衰 え る こ と は な い と い い ま す 。

こ の 大 震 災 が 発 生 し 広 範 囲 に わ た り 沿 岸 部 は 跡 形 も 無 く す べ て を 持 っ て い か れ て し ま い ま し た 。

被 災 地 で は 余 震 に 怯 え な が ら も 避 難 生 活 を 余 儀 な く さ れ て い る 方 々 、 あ る い は 、 も は や そ こ を 去 ら な け れ ば な ら ぬ 人 々 も 多 く お ら れ ま す 。

前 代 未 聞 と い い 、 想 定 外 と し 、 さ ら に は 国 難 で あ る か の こ と く 受 け 止 め て お り ま す も の の 、 私 達 は 今 こ こ で

「 当 たり 前 で あ っ こ と 、 ま た 当 然 の こ と と し て と ら え て い た こ と 」

が 実 は そ う で は な か っ た こ と に 一 刻 も 早 く 気 が つ か

なければなりません。長い時間を要するかも知れないけれど次の世代のため、また有縁無縁多くの人々のために尽くすこと、言い換えれば、本当の優しさの実践に他なりません。本当の優しさとは、『実乗の一善』すなわち日蓮大聖人御在世当時から幾多の困難も法華経の御題目で乗り越えてきたという絶対安心があるのです。七百五十年という年月を日蓮大聖人から私たち御先祖を経て、今日も私たちがそれを受け継いでいるということは、誇りと申し上げてもよろしいかと存じます。

合掌

### 病によりて 道心はおこり候か

道心とは仏道を求める心であり、御本仏様の大きい慈悲に人生の総てをゆだねることのできる境地に通じる心です。

人は病を得、心や身体に苦しみを感じるにより、改めて健康のありがたみを知り、仏様や諸天善神に救いを求める想いが生じてきます。そこから南無妙法蓮華経の信仰の道に入り、御本仏様の御加護にすがって祈るならば、重い病も「少病少惱」に転じ、健康で安穩な生活に導かれるのです。

大切なのは、病という大きな苦しみに陥らないよう、普段の生活の中で常に道心を忘れず、御本仏様の不断の御加護を信じ、祈り続けるということです。現代社会を見れば、まじめで自分に厳しい人ほど頑張り過ぎて心身を疲れさせ、難しい病に陥ってしまったっています。心身に少しでも病を感じたら、それこそが「疲れているのだから少し休みなさい」という御本仏様のお導きに他ならないのです。

### 支え合う姿に

数百年に一度と言われる東日本大震災。当地も断水・停電が暫く続きライフライン復旧と共に報道が再開され、嘗て風光明媚であった処はがれきの山と化し、その惨状の有様に驚愕の一言でした。

その中で我が身命をも惜しまず、公私共に復興と救助に邁進される人々に、畏敬の念を抱きつつ報道を見ていますと、ある避難所の様子が映し出されて居りました。御自身も避難所生活を強いられているにも関わらず、それぞれが一生懸命に皆と一緒に、自分のできることを一人一人がお互いに支え合っている姿が映りました。

無償の支え合い、たとえ自覚をせずとも皆お釈迦さまの子。「冬は必ず春となれり」を心に刻み、必ずや震災以前にも増して皆と手を携え、心身共に安心して優しい心で日々を過ごせることを祈り、併せて、幾多の尊い犠牲者の方々の御冥福を祈っております。

### 大震災に想ふ

東日本を襲った震災による津波は、郷土から家屋から、

数多の家族の尊い命まで全てを奪い去りました。ただ茫然と立ち尽くすばかりです。

さらには、原葬による目に見えぬ恐怖、日々増大する人々の困窮、自然の猛威の前になすすべもないことを痛感致しました。しかしながら、一週間後の春の彼岸、四月八日の花まつり、二十八日の立教開宗会を考えたとき、お釈迦様はお生まれになるとすぐ立ち、七歩進んで

「天上天下、唯我独尊」と宣言なされ、宗祖日蓮大聖人は、旭が森で七字のお題目を高らかに唱えられました。迷いの六道を越え人類を救う一步を歩み始めたお釈迦様、その真意を汲み取られた大聖人七歩と七字、これこそが人間による人間の普く救済の誓いです。その事をよく心に刻み、今、この時一步踏みだす勇氣を持ち、お題目を唱えて、苦しみを共有し、ともに支え合い復興という長い道のりを歩み出しましょう。

合掌

### 写経納経者情報

#### 六月一日現在の納経者

東大阪市	高木	重雄様	二回納経
東大阪市	細川	ツヤ様	一二三回納経
東大阪市	細川	和代様	二回納経
八尾市	伊藤	玲子様	二八十回納経
大 阪市	溝口	雅子様	一〇〇回納経
柏 原市	岡本	ユミ様	一四回納経
羽曳野市	矢野	勝正様	三七五回納経
西 宮市	近藤	悌藏様	一〇回納経
箕 面市	田村	邦江様	四四回納経
奈 良県	上西	富美代様	一六五回納経
奈 良県	塩谷	敏雄様	六〇回納経
堺 市	橋本	進様	一六五回納経
守 口市	古南	靖子様	五回納経
鶴 見区	横内	喜美子様	六〇回納経
奈 良県	加藤	利秀様	五回納経
八 尾市	佐藤	晶子様	一〇〇回納経
東大阪市	松永	祐子様	三回納経
大 阪市	住友	陽子様	一回納経

納経者皆様今月も御苦勞さまで御座います。

写経とは己の私欲を欲する為に書き写すものではありません。己の心を出来る限り、仏の御言葉（御経）を書き写し、己の心を仏の心に少しでも近付けると言う行の一つであります。自分の字はその時の己の心を表します。その字を視て己の様を悟り、反省してみても如何でしょうか。

その為にも私は、皆様の今の心の俣を正直に写経に表し、自分の心を磨く手段として、お勧めしております。

合掌